

# アイヌ語会話字典序

高田智和（国立国語研究所） 訳

文学士金澤庄三郎氏は大阪出身で、博言学科に学び、明治 28 年から 30 年まで、前後合わせて 4 回北海道に赴き、滞在日数は合計 150 日あまり、実地にアイヌ語を研究し、『藻鹽草』の校正（東京地学協会報告の中に掲載）、バチェラ氏のアイヌ字引の研究などを行い、また、実地研究によって集めた材料から本書を編集した。本書によって同氏の大学院在学中のアイヌ語研究の成果を知ることができる。私は、本書を通読して、多少の注意・助言を加えたことにより、本書の表紙に私の名前も加えることになった。アイヌ民族は遠くない日に絶滅するであろうが、日本人のアイヌ語研究はまだ盛んではない。アイヌ語研究は文科大学の随意科であるが、決して十分なものではない。世間の有志の中に、バチェラ氏の字典や、キリスト經典の訳書などを読み、この金澤氏の会話字典を持って、アイヌの中に入って実地に研究を行う者が多く出れば、教授上田萬年君が文科大学にアイヌ語研究を取り入れたことの効果が、初めて表われたとすることができるだろう。

明治 31 年 3 月  
東京にて  
神保小虎

## 凡例

本書は、私が理学博士神保小虎先生の教えを受け、アイヌ語研究による知見をもとに編集したものである。将来、北海道へ渡ろうとする者に便利のように、加えて、東方諸言語の比較研究の資料となることを期待している。先生が学問に専念していることは、世間の誰もが知っていることで、アイヌ語研究のためには特に巨額の私財を投じて、アイヌ語研究の発展に努めている。また、恩師上田萬年先生は、研究の方針について、多くの貴重な注意・助言を私にくださった。本書をまとめることができたのは、両先生のおかげである。

本書は、体裁をドイツの Meyer's Sprachfuhrer にならい、辞書と会話編とを兼ねているので、通常の辞書として使う者は、巻末の索引を利用して、会話の題目を見つけなければならない。

単語の並べ方の順序について、普通の辞書と異なる点をあげると、第一に、濁音の行を、それに対応する清音の行の次に入れたこと、第二に、半濁音を、それに対応する濁音の前に入れたこと、第三に、鼻音・促音を最後に置いたことなどである。

単語の表記は、会話中のものであっても、もっとも普通なもののほかは、歴史的仮名遣いによらず、発音の通りの表記を用いる。

本書は、アイヌ語を言語学的見地から研究するために集めた材料から、普通に話されている言葉だけを選んで、試みに辞書にしたものであるので、足りないものも多いだろう。慌ただしく編集したため、単語の配列が崩れているものも少なくないだろう。後日の修正を期待する。

本書の出版に際して、金港堂主人にお世話になった。感謝申し上げる。

明治 31 年 3 月

大学院にて

文学士金澤庄三郎

索引

訪問

来

誰

這入

面会

多忙

帰

贈答

与

呉

天候

晴

雨

風  
雷

起居  
起  
座  
寢

食事  
食  
飲  
飯  
昼飯  
晚飯

散步  
步行

晝夜  
日  
暗  
灯

寒暑  
暑  
寒

病氣  
病  
患

旅行  
出立  
別  
行  
荷物

馬  
乘  
馬車  
船  
道  
村  
山  
橋

宿泊  
部屋  
旅籠

売買  
売  
買  
直段  
下価  
払

年齢

貸借  
貸  
借

問答  
云  
聞  
理解